

今年度も学校訪問指導を実施します！！

今年度の学校訪問指導の実施にあたっては、昨年度末に実施した学校アンケート結果等からその成果と課題を踏まえ、実施方法や内容等について以下のように具体的な改善を図りました。
市町担当者による計画訪問(前期)は、5月18日にスタートし、7月13日にすべて終了しました。学校訪問指導の実施にあたり、各学校には大変お世話になりました。ありがとうございます。

1. 第 群 市町担当者による計画訪問

訪問回数を前期、後期の2回とし、計画から実施、まとめまでの取組状況について把握し、継続的な支援が行えるようにします。
市町教育委員会と連携して学校訪問をする等、情報交換できる機会の充実を図ります。

2. 第 群 教科等担当者による計画訪問

これまで原則年1回までとしていた訪問回数を2回までに拡大します。

3. 第 群 特別支援教育に関する計画訪問

特別支援学級・通級指導教室を新設した学校、特別支援学級・通級指導教室を初めて担当する者がいる学校については、必ず訪問を実施します。

4. 第 群 生徒指導に関する計画訪問

従来の「ヒアリング訪問」の対象を、全中学校及び希望する小学校とします。
生徒指導の機能を生かした教育活動を推進する上から、授業参観を内容に加え。
「研修訪問」の対象を、市町教育研究会及び生徒指導関係団体等に限定し、市町教研への支援をとおりて教職員の力量向上を図ります。

【各訪問の共通事項として】

必要に応じ派遣指導主事、派遣社会教育主事等を含めた複数の担当者が訪問します。
市町教育委員会と連携し、学校訪問の充実を図ります。

各市町担当指導主事が学校を訪問させていただき、管理職の先生方や研究・教務主任等の先生方と協議をさせていただきました。その情報交換の中で、地域の特色や児童生徒の実態を踏まえ、教育諸課題に対する積極的な取組の実践について詳しくお話をうかがうことができました。
ここでは、その概要を紹介させていただきたいと思います。

【「確かな学力向上策」と教育研究の取組について】

- ・「伝え合う」、「学び合う」をキーワードにして学力向上に取組む学校が増えてきている。
- ・作成した「確かな学力向上策」を、学校評価や評価システムの自己目標等とリンクさせ、PDCAサイクルによる改善が進むよう工夫している学校が複数ある。
- ・学校司書やヘルパー等が学校図書館に入り、環境整備が着実に進められている。学校図書館の学習への活用は、管理職のリーダーシップがその推進力になっている場合が多い。
- ・国や県学力調査結果からも明らかなように、家庭学習の少なさが課題としてあげられている。基本的な生活習慣の定着を含めた家庭学習(生活)の手引きの作成・活用・見直しが進んでいる。
- ・保護者面談の際、家庭学習の手引きをもとに説明・協力依頼を行っている学校が複数ある。

【ふるさと教育を含めた地域との連携について】

- ・児童生徒が地域へ出かけて活動する機会を、「児童生徒の姿を地域の方々に直接見てもらう機会である」ととらえ、重視している学校が複数ある。
- ・人との出会いを「ふるまい」をただず機会として重視したり、その人の「思い」とじっくり向き合うための取組を大切にしている学校が多くある。
- ・「どのような支援が、いつ必要か」の情報を、学校と地域とが共有することを大切にしている。
- ・地域情報のデータ化や、コーディネーター機能の学校外移管を進める学校や地域がみられる。

【新教育課程の移行への対応について】

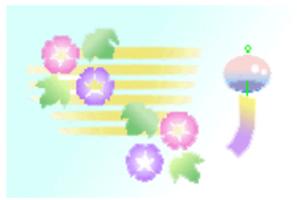
- ・全体計画や年間指導計画等の作成計画が立案され、それにもとづいて作業が進められている。
- ・特に小学校は移行期間最終年であり、夏季休業期間中を利用して準備作業が計画されている。
- ・先行実施内容の確認と指導計画作成、時数管理の徹底等の取組が多く学校の学校でみられる。

【その他について】

- ・幼稚園と小学校との交流では、第1学年が交流することで小学生としての自覚が図られた。
- ・市町や公民館事業等の会場を学校に意図的に設定し、児童生徒と地域住民との交流機会にすると共に、子どもたちの姿を地域の方に見てもらう機会としている。

所報
第33号

管内の教育



主な内容

- 1 所長「最近の若者のマナーと家庭のしつけ」
- 2 教科指導力向上セミナー - 小学校理科・中学校数学 -
- 3 今年度も学校訪問を実施します！！

出雲教育事務所
平成22年 7月

「最近の若者のマナーと家庭のしつけ」

所 長 三 島 修 治

本年度から「ふるまい向上プロジェクト」事業がスタートした。管内の小中学校管理職対象の教育行政説明会において、本事業を取り上げ、県教委としても、関係部局と一体となって、県民運動として取り組んでいくこと、家庭・地域・公民館等の関係者と一緒になって取り組んでいきたいこと等の考えを示した。ここでいう「ふるまい」とは、礼儀・作法から思いやりや感謝の心までの幅広いものを意味している。現在、各学校で取り組まれている「ふるさと教育」「食育や生活習慣づくり」等の取組が「ふるまい向上」の視点で見直され、学校・家庭・地域・関係機関が連携を図りながら教育活動を展開されることを願っている。

ところで、最近、ある雑誌に広田照幸教授(日本大学)の「日本人のしつけはダメになったのか？」(注1)というタイトルの文章があった。前述したように本年度から「ふるまい向上」に取り組んでいくこともあってタイトルに興味を引かれて読んだが、著者の今の若者のマナー、家庭のしつけや親子関係のとらえ方についてなるほどと思ったので、一部を要約して紹介する。

広田教授は、最近の若者のマナーは乱れていると言われているが、むしろマナーのレベルは上がっていると考え、マナーが乱れているのではなく、マナーにうるさい時代になっていると述べている。その背景として、みんなが自分の価値観の中で「普通はこうするよね」とマナーの水準を押し上げており、そうでない人を見ると、「不愉快だ」「迷惑だ」と非難する人が多いように思うと主張している。

家庭のしつけについては、高度経済成長以降、母親が一生懸命に子育てをする時代になったが、同時に、「家族」が何よりも大切という意識が強まったため、家族以外の人には子育てに介入しにくくなり、結果として親だけが子どものしつけや人間形成に

全面的な責任を負わざるを得なくなったと述べている。したがって、今の家庭がダメになっているのではなく、むしろ一生懸命しつけをしていると主張する。ただ、親のしつけの責任が昔に比べてはるかに重くなっていること、さらに、親の考え方も多様になっているが、自分とちがう生き方を認めようとしない傾向があることを述べている。そうした中で、貧困や多忙や家庭の不和で責任を担いきれない家庭がどうしても出てしまうこと、また、孤立した子育てをする中で、思い通りにいかなくて親が追い詰められるケースも見られると述べている。

今、私たちは、ともすれば、「今の子どものしつけや若者のマナーはなっていないから」とか、「家庭の教育力が低下しているから当然」という見方で、子どもたちや家庭が抱える問題を見てしまう傾向があるのではないか。そうした見方の中で、子どもや家庭への支援を考えても、子どもやその親の心にきちんと響いていかないのではないだろうか。子どもたちや家庭の状況を、背景も含めてしっかりとらえることで初めて、子どもや家庭が望んでいる支援の内容が見えてくるのではないだろうか。広田教授の主張から、改めて、現代の子どもたちや若者、家庭の置かれている現状や抱える問題について考える機会になった。

先日、「ふるまい向上プロジェクト」事業の一環として、「子どもの食育・生活習慣づくり推進フォーラム」が開催された。会場の斐川町中央公民館は、関係者で一杯であった。会場には高校生の姿もあり、その一人から協議の時間に質問が出された。そのやり取りを聞きながら、高校生が参加していることには大変感心するとともに、こうした世代が、食育や生活習慣づくりに関心をもっていることに嬉しくなった。「ふるまい向上」は全世代の県民が手をつないで取り組む県民運動を目指しているが、島根の若者も大いに期待できると思っている。

注1：参考・引用文献
広田 照幸(日本大学文理学部教育学科教授)
「日本人のしつけはダメになったのか？」玉川学園、2010.4月号、 738

教科指導力向上セミナー

- 小学校理科・中学校数学 -

出雲市立平田小学校〔6月3日(木)〕, 松江市立玉湯中学校〔6月18日(金)〕を会場に、『教科指導力向上セミナー 小学校理科 , 中学校数学 』を開催しました。

この研修は、平成21年度の島根県学力調査及び全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、公開授業や講義等を通して、教科の授業改善のための実践力の向上を図ることを目的としたものです。

小学校理科 は法政大学生命科学部環境応用化学科の左巻健男教授による3年生の公開授業、講義・演習、中学校数学 は筑波大学附属中学校・高等学校の大根田 裕教諭による1年生の公開授業、講義・演習を実施しました。参加者の感想から、それぞれの研修の概要をお知らせします。

小学校理科

公開授業



学習と日常生活をつなげる部分を見られ、参考になりました。素材を意識することがいかに大切かが分かりました。

金紙やアラザンなどの素材に着目する視点や子ども達の驚きを意欲につなげる視点が参考になりました。



協議

概念を形成する上で、言語化が有効であることが分かりました。言葉を大切に授業を進める必要性を感じました。



生活の中から見つけた生活につなげたり学習にしていけることの大切さを知りました。

講義・演習



授業の流れはよく考えるが、その教材についてもっと調べたり研究したりする必要を感じました。豆電球のことも知っているようで知りませんでした。「科学的な考え方を大切にするというベースがあり、そして、教材の提示の仕方や発問の工夫等へとつながる。」考えさせられることが多かったです。



全体を振り返って

新しい提案を受けたように思いました。

1時間の授業だけを考えるのではなく、単元全体をもう一度考えたいと思いました。

左巻先生の授業に対する思いと科学に関する知識の豊富さが伝わってきました。

教師自身が学習内容を「楽しい!」と感じ、本単元・本時のねらいをしっかりとって授業することが大切だと思いました。刺激になりました。

担当者から

本セミナーでは、次の点について先生方にとらえていただきました。

単元としての授業の流れを構想すること

子どもたちにどのような力を付けるのかは、単元で明らかにしておく必要があります。

単元の中の1時間として授業をとらえた上で、指導方法を工夫することが大切です。

思考力・表現力をはぐくむ学習活動を計画すること

セミナーでは、科学的な言葉を使用して考える活動の一例が示されました。

思考力・表現力をはぐくむために、科学的な言葉を使用して説明する活動の工夫も考えられます。また、観察記録や実験データを表に整理したりグラフに処理したりして考察する活動も有効な学習活動といえます。

参加者の先生方には、本セミナーで研修したことを授業公開等により学校内で伝達していただき、理科授業の一層の充実を図っていただきますようお願いいたします。

中学校数学

公開授業

生徒が自分の考えを説明する場が多く、どのように設定するのかとても勉強になりました。

考える力を育てるためには、教材研究を行い、どの場面でどのように考えさせるかが大切であることを改めて感じました。生徒の意見の引き出し方は参考になりました。

iPodを使用した課題提示により、それまで発言をしていない生徒がつぶやいたり隣席の生徒と意見を交換したりしました。ICT機器を有効に活用することも挑戦すべきと感じました。

講義

生徒自らが主体的に授業を行っており、日頃の自分の授業を見直すいいきっかけになりました。生徒の会話の中から「気づき」や「声」を拾い上げ、その中にある数学的な見方や考え方を活かすように授業を工夫していきたいです。

新しく加わった内容を指導した経験がなく、大変参考になりました。講師の先生が普段の授業で使っておられるプリントや、ノートの書き方の資料、生徒の思考力をのばし深める教材教具など、授業の参考にしたいです。

講義・演習

教員が教えることと生徒に考えさせることをうまく組み合わせる工夫が必要だと感じました。

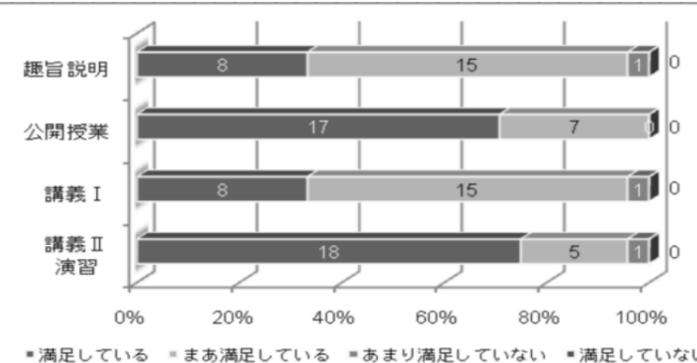
問題の提示の仕方、ねらいの立て方など、具体的な問題を通して説明され、自身の教材研究の方向性が見えてきました。

基礎・基本の定着ばかりが気になり、数学を生み出そうとする生徒のパワーを引き出そうとしていなかったかもしれないと感じました。

数学的な見方や考え方は生徒の弱いところであるが、どういう授業でそれが身につくのか、その方向性が見い出せました。



アンケート集計結果



担当者から

今回のセミナーを通して、生徒が「あれっ?」「どうして?」と思い自分の考えを説明したくなるような課題を与えることや、生徒のつぶやきを拾いそれらをつなげることなどが大切であることを実感していただけたと思います。各学校の取組を再度見直していただき、生徒が「わかった」「楽しい」と感じる数学の授業を展開していただきたいと思います。